

脳神経内科専門医に聞く

脳神経内科部長

くほ まさひろ
久保 雅寛



パーキンソン病診療ガイドライン(2018)について



パーキンソン病は、脳の神経細胞に異常が生じて、さまざまな運動障害がみられる病気です。神経伝達物質の一つである「ドパミン」という物質の量が減ることによって発症します。

パーキンソン病の代表的な症状は、①じっとしているときに手足がふるえる（静止時振戦）、②筋肉がこわばる（筋強剛）、③動作が遅くなる（運動緩慢）、④バランスをくずした時に姿勢を立て直すのが難しくなる（姿勢保持障害）などの運動障害で、進行すると日常生活に支障を生じてきます。そのほか、睡眠障害、自律神経障害（たちくらみ・排尿障害・便秘など）、嗅覚の低下、精神症状（うつ・不安・幻覚など）がみられることもあります。

2018年5月に、パーキンソン病の診療ガイドラインが改訂されました。

新しいガイドラインは、新たな知見や診断法・治療法の登場を反映した、現時点での標準的な診療の指針となっています。

現在のところ、パーキンソン病を確実に診断できる検査法がないため、診断は主に症状をもとに行われます。改訂されたガイドラインでは、中核となるパーキンソン病の症状の新しい定義が示されています。

新しい定義では、「運動緩慢がみられる」ことが必須とされ、加えて「静止時振戦か筋強剛のどちらか1つまたは両方がみられる」ものとされています。

従来の定義に含まれていた「姿勢保持障害」が外されていますが、これはパーキンソン病の姿勢保持障害は、症状が進行してから現れることがほとんどで、早期からこの症状がある場合には、むしろほかの病気が疑われるためです。新しい診断基準では、この定義に当てはまる症状があることに加え、ほかの病気の可能性を示す要因がないか、パーキンソン病の可能性を高くする要因があるか、などから鑑別します。早期のパーキンソン病をより確実に診断し、早期に治療に結びつけていくことを目的とした改訂です。

検査を組み合わせることで他の疾患の可能性を下げるとともに、抗パーキンソン病薬の効果を見るなどして経過を見る形で診断していきます。

本人や家族など周りの人に、パーキンソン病のような症状がある事に気付いたら、早めに脳神経内科を受診するようにしてください。

発行：独立行政法人労働者健康安全機構富山労災病院 地域医療連携室

富山ろうさい病院だよりは、当院ホームページにも掲載しています。

【連絡先】0765(22)1280(病院代表)

E-mail: chiiki2@toyamah.johas.go.jp